

ベトナムの植物検疫事情

お 小 畑 琢 志

2000 年 11 月 20 日から 01 年 5 月 20 日まで、JICA 専門家としてベトナム社会主義共和国の植物検疫に対する指導・助言や研修に携わった。勤務先はハノイの農業地域開発省植物防疫局植物検疫課* である。ベトナム植物検疫の現状および技術協力について所見を述べ、参考に供したい。

I ベトナムの植物検疫

ベトナム戦争（1960～1975）を耐え抜き、南北統一を果たしたベトナムは、その後もカンボジア侵攻、中越戦争など戦乱を重ね、ようやく内外の緊張関係を解き、平和を取り戻したのは 1989 年のカンボジア派兵の撤退以後である。ベトナムの植物検疫は南北統一後、ハノイ中央政府を頂点とした体制に改編された。現行の植物防疫検疫法（1993）の制定から数え、その歴史はまだ 10 年ばかりに過ぎない。

ベトナムの国土は日本よりわずかに狭く（0.9 倍）、南北に細長い S 字型で、中央部は狭く東西 50 km しかない。東側だけが海岸線で、北部は中国と 1,150 km にわたり、西側もラオス、カンボジアと延々国境を接している。植物検疫では内陸の国境検疫のウェイトが高い。

1 植物検疫組織

（1）中央機関

中央機関はハノイの農業・地域開発省植物防疫局である。局の中に植物検疫事務を担当する植物検疫課（職員 5 名）がある。植物防疫の行政権限は局長・次長 4 名（2 名は南部ホーチミン駐在）で構成するトップマネージメントに集中している。植物検疫課を含め、「課（Division）」はそれに従属する補佐機関である。

（2）植物検疫所

植物検疫所は全国で計 39 か所あり、主な海空港のほか、陸の国境地点に多くの出張所を置いている。職員数は計 172 名。組織は 2 段階制で、全国を 9 管区（Regional Sub-Department）に分け、管区を代表する

Plant Quarantine Situation in Vietnam. By Takushi OBATA
(キーワード: ベトナム植物検疫、技術協力)

* Plant Quarantine Division, Plant Protection Department,
Ministry of Agriculture & Rural Development.

植物検疫所の長が管轄している。このほか末端組織として、全国の行政区（61 省）に省（Province）の植物検疫所がある。

（3）付属機関

① 中央植物検疫調査室（Central Plant Quarantine Laboratory）

ハノイの植物防疫局庁舎内にあり、発見病害虫等の同定分類、重要検疫病害虫や消毒に関する調査研究、植物検疫官に対する研修指導などを行っている。職員数は室長（Director）以下 18 名である。

② 隔離検疫所（Post-entry Quarantine Center）

ハノイ郊外にあり、職員 12 名。ベトナムでは種苗類の輸出入は国家の許可制であり、すべての輸入種子・苗等を隔離検疫の対象として栽培地検査を行う。隔離検疫所は各地の植物検疫所から送付される輸入試料について病害虫の検査・検定を行っている。

2 植物検疫の法制

基本法は「植物防疫検疫法」（Plant Protection and Quarantine Ordinance, 1993）で、植物防疫、農薬取締および植物検疫の三本立てとなっている。植物検疫の部分はこの法律を受け内閣が制定した「植物検疫規則」（Plant Quarantine Regulation, 1993）が基本である。さらに具体的な検査方法や基準等については主管大臣の告示、細部運用に係る植物防疫局長の通達があり、検疫実施上の規定はほぼ揃っていると見受けられる。

3 検査業務量

輸出入検査量は年間約 800 万 t、種類は約 120 種類。輸出品はコメ、コーヒー、ラッカセイ、果実類（マンゴー、バナナ、レイシ、リュウガン等）、木材、木材製品などである。輸入は小麦粉、コーンミール、フスマ、コショウ、タバコ、野菜、果物（リンゴ、ナシ、スモモ、オレンジ、パインアップル等）など消費物資のほか、生産資材の種子類（コメ、トウモロコシ、サトウキビ、野菜等）、果樹苗、林木、観賞植物などで、輸入先は 100 か国以上。業務量としては輸出米の検疫業務が約 8 割を占めている。

4 植物検査の実際

中越国境の植物検査所で携帯品、トラック貨物の検

査、ハイフォン港で小麦粉の本船検査、原綿のコンテナ検査を見る機会があった。いずれも基本的に日本の場合と同様な方法で実施されている。近年中国国境の交易が急増しており、工業化が進んだ中国からあらゆる商品(家電製品、オートバイなど)が洪水のように流入している。農産物ではリンゴ、ナシ、ジャガイモなどがあり、ベトナムからの輸出には見るべきものがない。国境地帯は多くの山岳民族の生活圏であり、けもの道のような通路が無数にある。これを利用した密輸が跡を絶たず、国境検疫の泣きどころである。

II 日越植物検疫セミナー

植物検疫に関する指導・研修については、ベトナム当局の要望を入れ、全国の植物検疫関係職員を一堂に集めた日越両国共催の「植物検疫セミナー」を計画した。所要経費の全額(6,624 USドル)をJICA負担に仰ぎ、次のとおり開催した。

○テーマ：

- ① 植物検疫を巡る世界情勢と国際植物検疫基準について(第1日)
- ② 日本の植物検疫の現状(第2日)

○日程：

- ① 北部会合 2001年3月19・20日(ハノイ市 Tay Ho Hotel ホール)
- ② 南部会合 2001年3月27・28日(ホーチミン市植物防疫局会議室)

○参加者：

植物検疫中央行政機関および地域機関の幹部職員および植物検疫官(北部68名、南部55名 計123名)

本セミナーは共催者代表(日本側: JICAベトナム事務所長、ベトナム側: 植物防疫局長)が臨席して開会式を挙行し、植物検疫トップの局次長がセッションの座長



写真-1 「日越植物検疫セミナー」ハノイ会合を終えて
(2001/3/20)

をつとめた。研修会なので中身は講師の独演会であったが、座長の誘導により活発な質疑が展開した。私が選定した堪能な会議通訳のお陰で、講義も万事円滑であった。丸々2日間、昼食・休憩も含めて皆行動を共にし、友好を深めることもできた。終了後、過分の賛辞をもって労をねぎらわれ、任期半ばを過ぎてようやくひと仕事した思いであった。また、本セミナーにはマスコミの取材が入り、日本の技術協力の現地宣伝に一役買った。

さらに、セミナーを機に、ベトナム検疫関係者の上から下まで私に対する仲間意識が広がり、遅ればせながら情報取りもしやすくなったのは余得であった。

III 検疫体制の問題点と技術協力

ベトナム植物検疫の組織体制は、一応の体裁を整えている。検査部門では、各管区の本部は広壯な庁舎をもち、顕微鏡等の検査・研修用の機器・備品類は外国の援助で新しいものが必要最低限度には配備されていたが、図書や参考文献はほとんどない。研修を拡充し、職員の技能の底上げを目指す必要がある。

検査部門に比べ、中央の技術部門の整備が遅れている。植物検疫の技術センターであるべき中央植物検疫調査室は設備が貧弱で、顕微鏡など若干の新機器類は研修目的を重点に世銀などの外資で導入したものである。消毒技術関係には見るべき測定機器がなく、特に見劣りがした。病害虫の同定分類でも細菌、ウイルス関係は全く手つかずである。技術部門の他の一つ、隔離植物検疫所も同じ状況で、制度の目的と現実には大きな乖離がある。調査研究および検査・検定の環境を整え、精鋭的な人材を集め、技術力の基盤を積み上げていく必要がある。

また、ベトナムでは、検疫統計の重要さに関する認識が欠けている。中央・地方を通じ一元的な検疫統計システムを早急に整える必要がある。

窮屈財政下のベトナムが、これらの課題を自力で達成することは至難である。先進国の援助により、施設・機器備品を供与し、それと組み合せて長期の技術協力プロジェクトを導入し、後押しをしない限り、前途は遼遠である。最終報告会には、検疫組織として基礎的な技術力の確保を最優先とする勧告を提出し、JICAにも報告した。

おわりに

ベトナムの植物防疫機関は英語がほとんど通じない。アンケートに頼る情報収集も隔靴搔痒で難渋し、専門的な論議どころではなかった。今後は派遣専門家に対し英

語が通じる窓口役を確保することが絶対条件である。

ドイ・モイ（刷新）政策のもと、経済開放路線を走るベトナムであるが、政治は共産党一党が支配する社会主义国家である。中央の行政機関は情報の秘密主義や仕事上の縛り意識が強い。これは仕事を運ぶ上で非常な障害になるが、かなり時間を要しても、ひとたび信頼をかちとれば、自ずと道が開けてくることも経験した。

ベトナム人はプライドが高く、勤勉で、向上心も旺盛である。日本人と顔かたち、気質も似ており、人情・文化・風習に古きよき日本を見る思いがした。アジアの先進国日本に対する憧れと援助への期待は強いものがある。技術協力を提供する相手としては、やりがいを感じることのできる国だと実感した。

好評の植物保護ライブラリー

- イネいもち病を探る**
- 作物の病気を防ぐくすりの話**
- 虫たちと不思議な匂いの世界**
- 日本ローカル昆虫記**
- ミクロの世界に魅せられて**
- 茶の効用と虫の害**
- リンゴ害虫の今昔**

各冊とも B6判 定価 1,326円税込み（本体 1,263円）

- 口絵 2 頁 + 本文 174 頁 小野小三郎 著（送料 240 円）
- 本文 121 頁 上杉 康彦 著（送料 240 円）
- 本文 187 頁 玉木 佳男 著（送料 240 円）
- 本文 220 頁 今村 和夫 著（送料 310 円）
- 本文 221 頁 後藤 正夫 著（送料 310 円）
- 本文 166 頁 刑部 勝 著（送料 240 円）
- 本文 270 頁 奥 俊夫 著（送料 310 円）

お申し込みは直接当協会へ、前金（現金書留・郵便振替）で申し込むか、お近くの書店でお取り寄せ下さい。

社団法人 日本植物防疫協会 出版情報グループ 〒170-8484 東京都豊島区駒込1-43-11

郵便振替口座 00110-7-177867 TEL(03)3944-1561(代) FAX(03)3944-2103 メール：order@jppa.or.jp

！好評の本誌「植物防疫」の特別増刊号！

各 B5判

No.2 天敵微生物の研究手法

岡田齐夫 編者代表

送料 140 円

222 ページ 定価 3,058 円（本体 2,913 円）

天敵微生物の研究手法（研究施設、天敵微生物の探索・同定・増殖等）を詳しく解説。

No.4 植物病原菌の薬剤感受性検定マニュアル

日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会 編 172 ページ 定価 2,800 円（本体 2,667 円）

送料 124 円

作物病害防除では耐性菌に関しては避けて通れない問題である。その耐性菌の確認する検定方法を詳しく解説。

No.5 日本産植物細菌病の病名と病原細菌の学名

西山幸司 著

送料 132 円

227 ページ 定価 3,200 円（本体 3,048 円）

我が国で発生する植物細菌病の病名・学名（新・旧）・報告者・文献名などを網羅いたしました。

No.6 植物防疫誌にみるカメムシ類

送料 148 円

278 ページ 定価 2,940 円（本体 2,800 円）

昭和 22 年の創刊号から平成 9 年までの関係論文全 61 編を年代順に再収録いたしました。

No.7 植物防疫誌にみるフェロモン研究

送料 180 円

381 ページ 定価 3,150 円（本体 3,000 円）

1968 年に誌面に登場し、1999 年までのフェロモン研究に関する論文 80 編を年代順に再収録しました。

お申し込みは直接当協会へ、前金（現金書留・郵便為替）で申し込むか、お近くの書店でお取り寄せ下さい。

社団法人 日本植物防疫協会 出版情報グループ 〒170-8484 東京都豊島区駒込1-43-11

郵便振替口座 00110-7-177867 TEL(03)3944-1561(代) FAX(03)3944-2103 メール：order@jppa.or.jp